

ALWAYS三丁目の夕日

——映画文学人生論

原作：西岸良平「三丁目の夕日（夕焼けの詩）」(1974年)

監督：山崎貴 (2005年) 脚本：山崎貴 古沢良太

出演：鈴木則文 堤真一 撮影：柴崎光三
鈴木トモエ 薬師丸ひろ子 音楽：佐藤直紀
星野六子 堀北真希 茶川竜之介 吉岡秀隆
石崎ヒロミ 小雪 古行淳之介 須賀健太

明日だって、明後日だって、五十年後だって
ずっと夕日はきれいだよ

山崎貴監督の映画『ALWAYS 三丁目の夕日』を観て複雑な気分になった。素直に言えば感動しているのだが、感動してはいけないとも思う。

原作は西岸良平の漫画。それが映画化され、小説化された。私の感覚では順序が逆だ。しかも、文学を茶化して、笑い物にしている。

そもそも、茶川竜之介、古行淳之介、川渕康成などという登場人物が文豪の名前にあやかっただのだ。なかでも駄菓子屋をやりながら児童向けの冒険小説を書いて、うだつのあがらない茶川竜之介は三丁目の人々からは「ブンガク」と呼ばれ、文学崩れ、人間のクズとしてあなどられている。

時代は東京タワーが建設中で、三種の神器（テレビ、洗濯機、冷蔵庫）が市場に出まわりはじめた昭和三十三年という設定だ。

「僕は芥川賞の最終選考に残ったこともあるんだけど、最近の慎太郎とか、健三郎とかはてんでなっていないよ」と茶川竜之介（吉岡秀隆）が酒処の女主人ヒロミ（小雪）を相手に気炎をあげている。文学賞へ応募しても落選ばかり。なんとか売れるのは児童向けの小説だけというのが実状だが、美人を前にして格好をつけたのだ。すると、児童文学に力を入れていると言ったため、子供に理解のある文化人に預かってもらえたらと、身寄りのない男の子を押しつけられてしまった。

ALWAYS 三丁目の夕日

映画文学人生論



その男の子が古行淳之介（須賀健太）で、いくら冷たくされても、出ていこうとはしない。実は竜之介の冒険小説のファンだった。竜之介を心から尊敬している。ノートに書いた自分のアイデアを竜之介に利用されても怒るどころか、嬉しいですと言って喜ぶ天使のような子だ。

才能が枯れかけている竜之介が、作家の仕事を続けるためには淳之介は頼りになる味方としていなくてはならない存在となった。大金持の実父があらわれて、淳之介をひきとろうとするが、そのたびに淳之介はブンガクを慕って戻ってくる。いつかはおじさん（竜之介）とおねえちゃん（ヒロミ）と三人で暮らせる日を夢みて。

三丁目の住人たちの言動は粗野だが、鈴木オートの社長夫妻（堤真人、薬師丸ひろ子）、集団就職で雇われた六ちゃん（堀北真希）をはじめみんな根は親切だ。幸福は金ではない、心だというこというメッセージが伝わってくる、現実にはありそうもない話だが、「明日だって、明後日だって、五十年後だって、ずっと夕日はきれいだよ」と一平少年（小清水一揮）が言うのウソではない。たしかに、五十年後の夕日はきれいだった。

ブンガクの吉岡秀隆は昭和三十三年にはまだ生まれていないが、『男はつらいよ』では寅さんの甥だ。満男の成長した姿がブンガクとは楽しい。

五十年生きてみんなで見ると夕日